

第3学年 国語科の実践

- 1 単元名 物語の感想を書き、交流する 「ちいちゃんのかげおくり」
- 2 単元目標 登場人物の行動、情景、会話などの表現に着目して読み進め、感想をまとめる。
- 3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

～どのように「ひびき合う三の丸の子どもたち」を目指してきたか

「ひびき合う」とは、話し合いの中で、互いの考えを聴き合い、共感したり、自分とは違う考えに気づいたり、疑問に思ったりすることを通して、自分の考えをより確かなものにしたたり、より深めたり、あるいは変えたりすることであると捉えた。

そのため、学級経営の目標の中の一つに「自分なりの思いや考えをもち、自分の言葉で表現できる子どもの育成」を掲げ、1年を通して指導していくように努めた。まずは、話し合いのルールを身につけさせることである。はじめは、「黙って最後まで聴く」「大きな声で話す」といった当たり前のことから徐々に、「聴き方（聞き方）名人」「話し方名人」を目指せるようなルールを掲示したり声かけを心がけたりと、指導を繰り返してきた。その成果は、十分出てきている。また、クラスの中を何でも話し合える雰囲気にしていくよう同時に心がけた。教師も率先して、話を最後までしっかり聴くよう努めた。

次に、話し合う場面では、自分の思いや考えを上手にみんなに伝えられるよう、ペア・グループ・全体へと交流の場を工夫してきた。また、朝の会でのスピーチ活動を大切に扱い、一対一の対話を取り入れ、友達との対話の仕方を学ばせてきた。そして、道徳や学活では「エンカウンター」を多く扱うことで、コミュニケーション能力の育成を図った。楽しみながらの学習であったと思う。多少のいざこざがあっても、クラスの雰囲気はよくなり仲良しになったと感じた。

最後に、国語では音読をたくさん扱い、大きな声で読むことを多く体験させることで、ノートに書いてあることは進んで発表することにつなげた。その成果は出て、「ノートに書いてあることなら」と自信をもって発言できる児童が増えた。そして、だんだんノートに書いていなくても、進んで発言できる児童も増えてきた。

このように、「話す」「聴く」ことがしっかりできるようになったことで、友達の意見に「つけたし」することができるようになり、さらには「違う」意見をも伝え合うことができるようになってきた。ここから、「ひびき合う」姿が生まれてくるのだと考えた。

4 単元と指導について

①単元について	②指導について
本作品は、児童が初めて出会う戦争作品である。この物語は、「ちいちゃん」の表現力では周囲の大人に思いが伝わらず、ついには焼け落ちた家の防空壕で幼い命を落としてしまうというあまりにも悲しい結末の話である。児童が自分たちの生活とは遠くかけ離れた過去の出来事「戦争」や、当たり前と思っている家族との生活、命、未来などの「平和」を、主人公「ちいちゃん」の目を通して、また同時に客観的に自分自身の目で見つめることができる作品である。現代も戦禍の中で生活しているたくさんの「ちいちゃん」がいること、自分たちの町にも「ちいちゃん」がいたことに気づかせたい。 物語の舞台、第二次世界大戦からは、七十年近くが経過している。戦争を知らない教師が、二十一世紀生まれの児童に、指導する時代である。だからこそ5場面があると考ええる。 物語は一行空気で場面が分けられており、移り変わりがはっきりととらえやすい構成になっている。それぞれの場面で描かれた出来事、情景はどれも児童の心を動かす。また、人物の会話を「言いました」ではなく、「つぶやきました」「聞き返しました」と表すような細やかな表現も特徴的である。情景描写や言葉に着目した読みを展開し、ちいちゃんの置かれている状況や気持ちに気づかせて、感想をまとめさせたい。	《切実な問題》 今までになく長文である本作品で、初発の感想をしっかりとめるかやや不安はあるが、感想交流の場では、「自分と同じ」より「自分と違う」感想を大切に扱いたい。このことが、「もっと話し合いたい」という思いを生み、後の学習課題につながると思う。 4場面の「ちいちゃんが一人でかげおくりをする」ところに、感想が集まるのではないかと予想される。「かわいそう」だと。しかし、「よかったね」の感想もまた当然予想される。わかりやすい対立した事柄に対して、「私はこう思うけど」「友だちはどう思っているのだろう」という思いも高まるであろう。ここに、切実な問題があると考ええる。ここまでの学習を積み重ねてくることで、ちいちゃんの状況や心情にせまりたい。 《ひびき合いについて》 友達の考えを聴いて、「なるほど」と共感したり、「私とは違う考え」に気づいたり、「どうしてそう思うのか」と疑問に思ったりすることを通して、自分の考えをより確かなものにしたたり、より深めたり、あるいは変えたりすることがひびき合う姿と考える。 そこで、話し合いのルールをしっかりと確認する。ペア交流を経て、全体で交流していく、また、「違う」考えを大切にするために、相互指名に加えて意図的指名を行っていくようにしたい。

5 単元構想

国語 物語の感想を書き、交流する 「ちいちゃんのかげおくり」 全12時間

単元のねらい

- ・登場人物の行動、情景、会話などの表現に着目して読み進め、感想をまとめる。

初発の感想を発表し合う

- ・焼夷弾や爆弾はとてもこわい。・ちいちゃんは勇気のある子だ。・最後に死んじゃうのが悲しい。
- ・家族でかげおくりができたのに、戦争が激しくなってできなくなってかわいそう。
- ・おばさんに本当のことをなぜ言わなかったのかな。・ちいちゃんが一人ぼっちになってかわいそう。
- ・家族に会えてよかった。・戦争なんてしなければいいのに。

学習の課題を話し合う

考えを交流し合う

第1場面

「かげおくり」をしている家族の気持ちを話し合おう。

- ・ちいちゃんもお兄ちゃんも楽しそう
- ・お父さんは、死ぬことがわかっているみたいだ
- ・お母さんはいくさがないなればいいと思っている

・お父さん、お母さんにとって思い出になるでござい

第2場面

はぐれて一人ぼっちになってしまった、ちいちゃんの気持ちを話し合おう。

- ・お母さん、お兄ちゃん、どこに行っただ
- ・はやく戻ってきて
- ・こわいよ
- ・熱いよ
- ・助けて

第3場面

なぜ家族が帰ってくるかと信じていたのか話し合おう。

- ・母さんとしっかり走ってきたはずだから
- ・おじさんが後から来るよって言ったから
- ・帰ってきてほしいと願っていたから

第4場面（本時）

家族に会えたちいちゃんは、「かわいそう」だったのか「よかったね」だったのかを話し合おう。

- ・もう楽しいかげおくりはできない
- ・いくさの怖い思いのまま死んじゃったからかわいそう
- ・もう怖くないからよかった
- ・家族に会えたのだからよかった

第5場面

ちいちゃんは死んでしまったのに、なぜ5場面があるのか話し合おう。

- ・今は平和だってことだよ
- ・ちいちゃんもいくさがない時に生まれればよかったのに
- ・ぼくたちは幸せだったことだね

・4場面のかげおくりと比べさせたい。

- ・家族みんなのかげおくりから、一人ぼっちのかげおくり
- ・楽しいかげおくりからさみしいかげおくり
- ・家族の声とまぼろしの声

- ・追いかけてきます
- ・追いかけました
- ・血が出ています
- ・血が出ていました
- ・ひどいけがです
- ・ひどいけがでした

・「お母ちゃん、お母ちゃん」と「お母ちゃん」の違いに気づかせたい。

- ・現在形が臨場感を増していることに気づかせたい。
- ・「お母ちゃん、お母ちゃん。」
- ・お母ちゃん、どこ
- ・お母ちゃん、こわいよ
- ・「お母ちゃん。」
- ・あつ、お母ちゃんだ
- ・よかった

・「深くうなずきました」「また深くうなずきました」から、ちいちゃんの気持ちを考えさせたい。

- ・ほしいいの食べ方からちいちゃんの様子の変化に気づかせたい
- ・お母ちゃんとお兄ちゃんはきつと帰ってくるよ
- ・食べる力がなくなっちゃった
- ・死にそう

・「きらきらわらう」と「わらう」の違いを考えさせたい。

- ・「小さな女の子の命」としたことに気づかせたい。
- ・心からうれしい
- ・家族そろって幸せ
- ・会えてよかった
- ・他にもちいちゃんがいる
- ・今でもちいちゃんはいる

・主題に、せまらせたい。

- ・戦争は2度とやってはいけない
- ・平和って大切だ
- ・今だに戦争をしている国がある。私たちに何かできないか

- ・戦争のせいで、楽しかったかげおくりが悲しいかげおくりになった。
- ・ちいちゃんはお母さんたちが来ると信じていた。だから一人でもがんばっていた。
- ・ちいちゃんは家族に会えてうれしそう。でも死んでしまってかわいそう。
- ・戦争は恐ろしい。・今は平和。・まだどこかで戦争している。

学んできたことを生かして感想を書く

6 本時について

- (1) 本時目標 ちいちゃんが再び家族に会えた場面を通して、ちいちゃんの状態や心情を読み取り、感想をもつことができる。
- (2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点【評価】
ちいちゃんのかげおくり めあて 家族に会えたちいちゃんは、「かわいそう」だったのか「よかったね」だったのかを話し合おう。 白い四つのかげぼうし、すうと空に上がりました。 ・もう楽しいかげおくりができないから、かわいそう しょういだんやばくだんをつんだひこうきが、・・・ ほのおのうずが追いかけてきます。 ・もうほのおのうずが追いかけてこないから ちいちゃんは、お母さんとはぐれました。 ・死んじゃったけど、会えたんだから ひとりぼっちになりました。 お父さんとお母さんとお兄ちゃんが、わらいながら歩いて ・もう一人ぼっちじゃないから ちいちゃんは、きらきらわらいだしました。 ・笑顔が輝いているのだから、うれいんだと思う なぜ「ちいちゃん」とせず、小さな女の子としたのだろう ・ちいちゃんと同じように、他にも戦争で死んだ子がいるから ・今も戦争している国があるんだよ よかった	○自分のペースで4場面を音読するようにしたい。 ○全体で話し合う前に、ペア交流をさせることで、自分の考えや意見に自信をもてるようにする。 ○根拠となる叙述も発表できるように声をかける。 ○見やすい板書を心がける。 ○児童の意見の中で「きらきらわらう」の叙述が出た時、ただ「わらう」との違いにもふれるようにしたい。 ○「ちいちゃん」ではなく、「小さな女の子の命」としたことをとりあげ、ちいちゃんだけでなく、戦争で亡くなった子は他にもいっぱいいることに気づけるようにする。 ◇叙述をもとに、ちいちゃんの心情や状況を読み取っている。【読】 ◇わかったことや心に残ったことを書いている。【書】

7 実践を終えて

本単元「ちいちゃんのかげおくり」を読んだ感想を全員が書き、交流し合った。そして、全員で学習の課題を作り上げたことが、本時の課題が「切実な問題」になっていることにつながっていると思う。死んでしまったちいちゃんは「かわいそう」なのか「よかったね」なのか、と稚拙な言い方ではあるが、児童にとっては分かりやすい言い回しであることが課題をより身近なものとして受け入れられていた。

本時は、第4場面である。1場面からの学習を生かすことができるかどうか重要なポイントだったと言える。授業では、私の板書が追いつかないくらい、意欲的に児童は発言していた。しかも、今までの場面で学習してきたことを理由として取り入れての意見が多かったのである。これまで重ねてきたことの成果が出ていたと思った。また、本単元の学習を通して、「ひびき合う」姿を感じることもできた。大きく意見を戦わせるといった感じではなかったが、「私は〇〇さんと同じで～」「私は〇〇さんと違って～」としっかり自分の意見を伝えていた。実際、はじめの自分の意見から友達の意見を聴いて考えを変えた児童や、学習後の感想に友達の考えを聴いて、「なるほどと思った」と書いていた児童もいた。互いの意見を尊重しつつも、自分の意見をしっかり伝えることができるようになったことは、大きな成果であった。

今後もう少し考えていかなくてはいけないと感じたのは、国語の学習を進めるにあたって、本単元で言えば、ちいちゃんの言動や文章表現の中で、児童に気づいてほしいところ、考えてほしいところの扱いである。今回は、児童の感想や読み取りをきっかけにしたり、唐突になってしまっていたが教師から「この文章のところだけ・・・」と話題にしたりして、教えたいところはきっちり扱った。

このように、児童の願いや思いのつまった「切実な問題」と教師が国語科として「課題」にしたいこととのギャップをどう埋めていくかが課題と感じた。

さらに、話し合いに深まりをもたせるために、教師の出所を考えていきたい。